

# 青空カラー

From Blue Skies

作  
永山智行

登場人物

藤原雅彦  
藤原俊彦

伊元 學  
伊元えみ子

甲田ヒロト  
葉山玲子

もんちゃん

三橋並子

それは、いつのことだか……

デパート、と呼ぶにはあまりにも小さな建物。  
その屋上でのこと。

ヒロトが走りこんでくる。  
追いかけるように玲子

玲子 待ってよ、もう。

ヒロト (息が切れている)

玲子 (息を切らせながら) ヒール履いてるんやからね、あたし。

ヒロト (後ろを確認している)

玲子 なんで……

ヒロト え？

玲子 なんで急に走りだしたと？

ヒロト だって警察がおったやろ。

玲子 え、どこに？

ヒロト 階段降りたところよ。一階のほら、紳士服売り場のところ。

玲子 え？おった？

ヒロト おったって。

玲子 そうやったっけ？

ヒロト うん。

玲子 でもあなた、何もしてないんやろ？

ヒロト してないけどよ、なんかこう反射的に？「やべっ！」みたいな。

玲子 ふっ。

ヒロト なんよ？

玲子 あんたほんととちっちゃいがね。

ヒロト あん？

玲子 なんもしてないのに逃げたら、余計怪しいがね。

ヒロト だってなんか最近、警察が多くね？この町。

玲子 いや、そうやけどよ。

ヒロト なんかほら去年のアレとかバレたんじゃないやろかとか。

玲子 去年のアレって？

ヒロト ほらこのデパートの駐車場だよ、財布拾ってその金で飲み  
いったやろ。

玲子 ああ。

ヒロト アレとかバレたんじゃないやろかって。

玲子 ふっ。

ヒロト だからなんよ？

玲子 ううん、もういい。あー、走って汗かいたから、化粧が落ちたが  
ね。もう。

ヒロト 大丈夫。

玲子 え？

ヒロト それでもお前、きれいやから。

玲子 ほんとに？

ヒロト ほんとに。

玲子 どこが？

ヒロト え？

玲子 どこがきれい？

ヒロト んーとね、こう、全体的に？

玲子 えー。

ヒロト というかその、バランス的に？というか、ビジュアル的に？と  
いうか、こう、精神的に？というか、その総合的に？

玲子 ぼんやりし過ぎ。

ヒロト あ、えーっと、

玲子 無理せんでいいよ。

ヒロト ……ごめん。

玲子 ありがとう。

ヒロト ……。あのさ、  
玲子 何？  
ヒロト 最近なんか……  
玲子 何？  
ヒロト なんかも、優しくない？俺に？  
玲子 え、そう？  
ヒロト あのさ、  
玲子 何？  
ヒロト 俺もうすぐ死ぬとかな？  
玲子 え？  
ヒロト いやだって、なんか優しいんやもん、玲子。だからほら、なんかどつかで、俺がほら、もうなんか、不治の病で、それで余命半年とかって言うのを、こう立ち聞きして……  
玲子 何それ、その安っぽいドラマ？  
ヒロト だっておかしいやろ、俺に優しいって、俺なんか優しいって。  
玲子 何、そんなにいつもあたしキツイと？  
ヒロト いやそういうわけじゃないけど……  
玲子 だいたいあんた最近病院とか行ったと？  
ヒロト あ、いや……、歯医者ぐらい？  
玲子 歯医者で不治の病って何？  
ヒロト ー、歯槽膿漏？  
玲子 歯磨きしやん。  
ヒロト うん。え、じゃ、俺死なん？  
玲子 死なないんじゃない。…半年くらいは。  
ヒロト ー、半年け？  
玲子 わからんよ、あたしにも。でも、ないやろ、あんたが死ぬとか、そんな安っぽいドラマ。  
ヒロト そうやろか……

遠くで花火の音。

ヒロト え、何、これ？  
玲子 花火？

玲子、フェンス際まで歩いていき、

玲子 (見て) あ、あそこや、小学校。運動会やってる。

ヒロト え？

玲子 そつか、そんな季節やもんね。

ヒロト ー、どこ？

玲子 ほら、あそこ。あの農協の看板があるところのずーっと向こう。

ヒロト あ、あつたあつた。あそこ何小？

玲子 南小？いや、どこやろ……

ヒロト なんか……

玲子 何？

ヒロト いまもあるんやね、万国旗。

玲子 ああ。

ヒロト 懐かしい。

玲子 うん。

ヒロト 玲子、早かったと？かけっこ。

玲子 なんで？

ヒロト いや、なんかそんなイメージ？

玲子 ふふ。

ヒロト 何？

玲子 あんたほんと人を見る目がないがね。

ヒロト え、じゃ遅かったと？

玲子 ビリ。一年から六年までぜんぶビリ。だからほんと嫌いやった、

運動会。

ヒロト ー。

玲子 うん。

ヒロト へー。

玲子 不思議やね。

ヒロト 何が？

玲子 あんなに嫌いやったとに、こうして遠くから見たら、なんか懐かしい。

ヒロト ……（見る）、え？

玲子 え？

ヒロト 玲子、あその出身やったか？あの、南小？

玲子 違う。そういう意味じゃなくて……

ヒロト 何？

玲子 もういいが。

ヒロト えー。

玲子 でも、なんかここも久しぶりに来た。

ヒロト ここって、（指して）ここ？

玲子 うん。高校の時以来やるか？

ヒロト 高校の時って、でも何しに来てたど？

玲子 なんかよく覚えてないけど、なんかよく来てた、放課後に。ひとりで。それで、高二の時やったかな、そのステージで、美空すずめ

って人の歌謡ショーがあって、

ヒロト 美空すずめ？

玲子 うん。

ヒロト すごいわかりやすいね、その名前。

玲子 たまたまあたし出くわしちゃって、その人の歌謡ショーに、その日。で、お客さんなんか三人くらいしかおらんとに、でも、そのすずめさん、一生懸命歌ってて、なんか、うん、なんか、かつこいいって思った。

ヒロト それで歌手になりたいって思ったんや？

玲子 なんか……

ヒロト 何？

玲子 あたしの方が安っぽいわ。安っぽいドラマ。

ヒロト そんなことないって。だってお前、きれいやから。

玲子 ふふ。安っぽいわー。

ヒロト え、俺？

玲子 あたしたち。ね、おなかすいた。何か食べに行こう。食堂！この食堂、行こう。それでこうなんか安っぽいメニュー頼もう。ナポリタンとか。チキンライスとか。だって最後なんやる、今日で、ここ。ヒロト うん。

玲子 行こう、食堂。あたしいつも座ってた席があると。高校の時。

教えてあげる。そこで食べよう。

ヒロト うん。あ、でも大丈夫やるか？

玲子 何が？

ヒロト いや、警察。俺を追って食堂まで来んやるか？

玲子 はあー。安っぽいわー。

ヒロト え？

などなど言いながら、二人は去る。

雅彦がやってくる。

屋上から見える町並みをばんやりと眺めたあと、小さなステージに立ってみる。

弟の俊彦が声をかけた。

俊彦 プールに行こう、兄さん。

雅彦 おう。お前も来たつか。

俊彦 プールに行こう。

雅彦 プールってどこのプールよ。

俊彦 プールに行こう。

雅彦 もうないとよ、市民プールは。

俊彦 プールに行こう。

雅彦 だからもうないって。  
俊彦 プー  
雅彦 ないって！  
俊彦 プー  
雅彦 ない！  
俊彦 さん。  
雅彦 ?  
俊彦 くまの、プーさん。  
雅彦 ?  
俊彦 プー、ドル。  
雅彦 ……  
俊彦 プー、リン。  
雅彦 プーリンってなんか、プーリンって。「プリン」やるが、「プリン」  
俊彦 プー  
雅彦 ?  
俊彦 ラジル。  
雅彦 そら「プー」じゃないやろ。なんか「プラジル」って？何の汁よ？  
俊彦 なんかちよつと……美味しそうやがね。  
雅彦 兄さん。  
俊彦 ん？  
俊彦 おかえり。  
雅彦 おう。  
俊彦 今着いたと？  
雅彦 うん。今着いた。  
俊彦 バス？  
雅彦 うん、バス。いつまで走るんやろな。明日からもうここには降り  
る人おらんとに、デパート前。  
俊彦 どう？  
雅彦 何が？  
俊彦 そこ。

雅彦 あ、ここ（ステージ）か。  
俊彦 うん。  
雅彦 なつかしい。  
俊彦 ……。  
雅彦 ほら、よく一緒にステージに出てた人、いるやろ、女の人。こう  
ちっちゃい歌手の人。  
俊彦 ああ、いたね。  
雅彦 なんかね、最近あの人の歌思い出すとよね。なんでかわからんけ  
ど。  
俊彦 ふーん。  
雅彦 （ステージから降りながら）元氣やったとか？  
俊彦 誰？  
雅彦 お前よ。  
俊彦 ああ、うん、まあね。  
雅彦 んー……  
俊彦 何？  
雅彦 プラジル……  
俊彦 いいやろ、なかなか。  
雅彦 お前が考えたつか？  
俊彦 うん。  
雅彦 やるな。  
俊彦 まあね。  
雅彦 そもそもここなんで閉店すると？  
俊彦 お客さんが少ないからじゃない、やっぱり。  
雅彦 でも昔からそんなに多くはなかったやろ。  
俊彦 でも、ほら、あの時とか、すごかったがね。あの、ほら、  
雅彦 ああ、国体があった時？  
俊彦 そう。  
雅彦 あの年はなんかね、みんな浮かれてたもんね。  
俊彦 ここもお客さんでいっぱいやった。

雅彦 うん。でも俺たちの漫才はウケんかったけどね。  
俊彦 おっとー。

もんちゃんがやってくる。

もんちゃん あの、  
雅彦 あ、はい。

もんちゃん、空を指す。

雅彦 え？

雅彦、俊彦、空を見る。

もんちゃん ……

雅彦 え？

もんちゃん ひひひひひ。

雅彦 え？あの……

もんちゃん、空に向かって、手を握ったり離れた  
り……

雅彦 いや、あの……

もんちゃん ひひひひひ。

もんちゃん、そのまま去る。

呆気にとられている二人。

えみ子がいた。

えみ子 あんまり気にしない方がいいですよ。  
雅彦 ？

えみ子 いや、あの子。

雅彦 ああ。

えみ子 ご兄弟ですか？

雅彦 え？

えみ子 いや、お二人。

雅彦 あ、はあ。

えみ子 (雅彦を指して) 弟さん。

雅彦 兄です。

えみ子 あ、ごめんなさい。じゃ、(俊彦を指して) 弟さん。

俊彦 兄です。

雅彦 え？

えみ子 え？ん？双子？

えみ子、まじまじと二人を見る。

えみ子 ん？二卵性？

雅彦 あ、違います。ウソです。

えみ子 ん？ん？

雅彦 こいつが弟です。

俊彦 いや、こいつが弟です。

えみ子 ？

雅彦 (俊彦に) おい、もうやめろって。

俊彦 えへっ。

えみ子 ん？

雅彦 すいません。あんまり気にしないでください。そういうやつなん  
で。

えみ子 はあ。(見上げて) いい天気ですね。

雅彦 ああ。

えみ子 この空は……

雅彦 ……はい。

えみ子 いつかどこかで見た空によく似てる。

雅彦 ……

えみ子 ま、空なんてどこから見てもそんな変わらないでしょうけどね。  
つながってるし。

雅彦 え？

えみ子 いや、空。つながってますよね。ぜんぶ。

雅彦 ああ。

えみ子 (歌う) ♪空はさー つながっているんだぜ ぜんぶ イエイ

イエイ

雅彦 ?

えみ子 知りませんか?そんな歌?

雅彦 いやあ……

俊彦 (でたらめに歌う) ♪空はさー つながっているんだぜ ぜんぶ

イエイイエイ

えみ子 ほら。

雅彦 え、お前、知っちゃったか?

俊彦 いや。(でも歌う) ♪空はさー つながっているんだぜ ぜんぶ

イエイイエイ

えみ子 (歌う) ♪空はさー つながっているんだぜ ぜんぶ イエイ

イエイ

二人はでたらめに歌う。

雅彦 えー……?

そんな様子を見ているひとりの女がいた……

2

伊元がいる。

ぼんやりと、空のステージを眺めている。

玲子が戻ってくる。

玲子 あ。

伊元 ……どうも。

玲子 先生……?

伊元 ……

玲子 あ、先生だよ。

伊元 はあ……。えーっと、

玲子 あ、無理無理。

伊元 ?

玲子 思い出そうとしても、思い出せんから。

伊元 あのう……

玲子 あたし、先生の教え子じゃないから。

伊元 ああ。えーっと、

玲子 スカイラーク。先生たちよく来てたやろ。スナック。あ、たしか、

伊元 ……あ、あの時の、

玲子 そう。覚えてる?あたし?

伊元 あ、いや、ごめんなさい。

玲子 そうよねー。え、何してると?こんなところで。

伊元 いや、今日で、ここ最後って聞いたから。

玲子 ああ。え、何?ここになんか思い出とかあると?

伊元 いや、あの、あ、……まあ……

玲子 え、何、何?

伊元 あのう……



玲子 うん。

伊元 えーっと

玲子 いいがね、もったいぶらんでも。

伊元 お名前を。

玲子 ん？

伊元 あの、お名前を。

玲子 あ、あたし？

伊元 はい。

玲子 玲子。葉山玲子。

伊元 ん？なんか聞いたことあるような……

玲子 いいが。どこにでもある名前やかい。

伊元 玲子さんはなんでここに？

玲子 ここが一番高いからかな、この町で。だからあたし、男ができたら、最初にここに連れてくると。ま、別に何にもないんやけどね。ほかに行くところもないし。

いつの間にかヒロトがいる。  
サングラスをかけている。

ヒロト (伊元に) 傘、買って。

伊元 うわっ！びっくりしたっ！

ヒロト じいさん。

伊元 ん？

ヒロト 傘、買って。

伊元 え？

ヒロト 俺、傘、売ってるっちゃわー。ほら、これ(と、見せる)。

伊元 一本だけ？

ヒロト これが最後の一本よ。他のは全部売れたかいね。これだけ売れ残ってしまったてよ…。

伊元 ああ。

ヒロト だから買って、傘。

伊元 いやあ……

ヒロト (歌う)

♪おいらは 最後の残りもの

仲間みんな ひきとられ

けれども おいらにや

家がない

さびしくなんか ないけれど

あなたを ずぶ濡れなんかにや

したくない

伊元 …

ヒロト 二番。

伊元 あ、もういいが。

ヒロト 傘、買って。

雅彦がやってくる。

雅彦 (ヒロトに) あの、

ヒロト 何や？

雅彦 さっき売ってもらった傘なんだけど、

雅彦、傘を開く。

雅彦 穴が開いてるんですけど…

ヒロト おう。

雅彦 いや…

ヒロト ん？

雅彦 あの…

伊元 いいね、これ。

雅彦 ？

伊元 空が見える。  
雅彦 ……:

伊元 だって、開いたら、ほんとうの空が見えるっちゃよ。

ヒロト おう。

伊元 雨が降っても、

ヒロト おう。

伊元 ほんとうの空が見える。

ヒロト おう。

伊元 いいねー。

ヒロト お、買うか、じいさん？

伊元 いや、いや。

ヒロト おい！

伊元 ヒロト！

ヒロト え???

伊元 お前、なんしちよつかー？

ヒロト え?え?

伊元 声かけるなら別の人にせんか。いや、じゃなくて、やめんか、こ

んなこと。

ヒロト あ、あの……

伊元 お前、担任の顔も忘れたとか?

ヒロト え、えーつと

伊元 伊元。イモツチよ。

ヒロト あ。あ!

伊元 まっこちら。お前はー。

ヒロト あ……あ……

伊元 なんか、これがお前の今の仕事か?

ヒロト あ、ま、は、いや、あの……

伊元 結婚は?

ヒロト あ、ま、は、いや、あの……

ヒロト、思わず玲子を指す。

伊元 (見て) え?

ヒロト いや、まだ、あの、その式とか、そういうあれは、あれなんだ

けど……

伊元 ……、あ、そう……

玲子 ま、まだ五分五分かな。

ヒロト え、玲子おー。

玲子 冗談よ。大丈夫、もう諦めたから。

ヒロト いや、諦めたって……

玲子 「人生、諦めが肝心」、ですよ、先生。

伊元 そうやね、諦めは、大事やね。

ヒロト 先生!

玲子 さ、もう帰ろう。ごはんも食べたし。

ヒロト え……

玲子 お騒がせしましたー。

玲子、ヒロトを連れて出ていく。

雅彦 (気づいて) あ、あの、傘……

けれど二人はもういない。

残される、雅彦と伊元。

伊元 ……あの、

雅彦 ?

伊元 違ったらごめんなさい。

雅彦 はい。

伊元 トシ君のお兄さん、じゃないですか?

雅彦 ?

伊元 あの、漫才をされる。  
雅彦 あ、はい。  
伊元 あ、そうだ、やっぱりー。  
雅彦 あ、あの……  
伊元 あ、あの、トシ君の高校の担任をしてた伊元です。  
雅彦 ああ。  
伊元 何度かここで見せてもらったことが……、あの、なんかのお祭りの時ですかね……。  
雅彦 お祭りは、あ……、はい……。  
伊元 いまはもうされてないんですか？漫才。  
雅彦 ……わたしがちよつと遠くにいるんで……  
伊元 あ、そうですか。  
雅彦 あれ、じゃ、さっきの人は？  
伊元 え？  
雅彦 さっきの、傘売ってた……  
伊元 ああ、あ、トシ君と同じクラスだった、ヒロトです。  
雅彦 ああ。  
伊元 どこでああなったんだか……。ま、昔から他人に使われる子ではあったんですけど……。だから、ま、きつと、誰かに言われてあんなことするようになったんだとは思ってますけど。  
雅彦 でしょうね、きつと。  
伊元 卒業アルバムの写真なんか、こう、すみつこで妙に真面目な顔してたりするんですよ。あいつ。  
雅彦 ふふ。  
伊元 ま、ぜんぶ、もういい思い出です。  
雅彦 え？  
伊元 いや、退職したんで、わたし。  
雅彦 ああ。  
伊元 ここで、トシ君とお兄さんの漫才見たのも。  
雅彦 ……。

伊元 あれ面白かったですね、あの、なんか魔法使う、兄弟の話。  
雅彦 あ、覚えていらつしやいますか？  
伊元 結構、何回か見た覚えが……  
雅彦 ま、あんまりネタなかったんで……  
伊元 あ、ごめんなさい。  
雅彦 いえ。  
伊元 でも、また見たいですね、あれ。  
雅彦 あ、そうだ。  
伊元 え？  
雅彦 あ、いや、一緒に来てるんです、ここ、弟。  
伊元 そうなんですか？  
雅彦 ちよつと探して連れてきます。ちよつと待っててください。  
雅彦、出ていく。  
伊元、ふと口ずさむ。  
もんちゃん、空に向かって、手を握ったり離れたりしながら、やってくる。  
もんちゃん (伊元を見つけて) ひひひひひ。  
もんちゃん、伊元の隣に座り、空に向かって、手を握ったり離れたりする。  
伊元 うん。そうか。  
もんちゃん ひひひひひ。  
伊元 そうか。そうだな。  
もんちゃん ひひひひひ。  
伊元 うん。

しばらく、二人、そのままいる。

やがて、もんちゃん、そのまま去る。

それを見ていた並子が声をかける。

並子 ああ……

伊元 え？

並子 いま、なんかお話しをされてたんですか？

伊元 ん？

並子 いや、あの子と。

伊元 ああ。……うん。そうかな。

並子 ああ、どんな？

伊元 うん……。ちよつと昔の話かな。

並子 昔……ばなし？

伊元 サルがね、

並子 え？

伊元 サル。

並子 ああ、サル。

伊元 サルがヒトになるために必要だったものが二つあるらしいんです。

す。んーつと、四百万年前くらいの話。

並子 だいぶ昔の話ですね。

伊元 うん。でも地球ができて原子生命が――

並子 ゲンシセイメイ？

伊元 最初のいのち。

並子 ああ。

伊元 それが生まれたのが四十億年前だから、四百万年前って、そんなに前じゃなくって、最初のいのちがちょうど一年前に生まれたとしたら、サルからヒトが生まれたのは、今朝方くらいの話なんです。

並子 ああ……。じゃあわたしたちはまだ、今朝方ヒトになったばかりなんですか。

伊元 はい。

並子 今朝、わたしは、ヒトに、なった……

伊元 サルが、

並子 サル？

伊元 サル。

並子 ああ、サル。

伊元 サルがヒトになるために必要だったもの。

並子 ああ。

伊元 ひとつは「手」です。手の機能を発達させて、道具を使うようになって、サルはヒトになった。

並子 もうひとつは？

伊元 ……

並子 何ですか？

伊元 家族です。

並子 家族？

伊元 帰るべき家があって、ま、洞窟とかですけど、それから、味方になつてくれる者がいるっていうこと。その安心感で、繁殖期がなくなつて、私たちはいつでも子どもを生むようになって、それでヒトが誕生したんです。したらしいです。

並子 家族……

伊元 ……

並子 味方になつてくれる者……

伊元 ま、そうとも限らないですけどね……

並子 (伊元を見る)

伊元 ん？

並子 生物の先生だったんですね。

伊元 ふふ。はい。

並子もふと空に手を伸ばし、握ったり離したりして  
みる。

並子 四百万年前も……

伊元 はい。

並子 空はこうしてこんな色で、ここにこうして、あつたんでしょ  
うか？

伊元 どうなんでしょかね……

並子 そしてヒトは何をつかもうとしてたんでしょか。

伊元 ……もつと昔の話をしましょか。

並子 え？

伊元 三億六千万年ほど昔の話。

並子 ふふ。はい、ぜひ。(思いついて)あ、ちよつと待ってください。

並子、伊元をステージの方に移動させ、自分は教  
室の生徒のように、伊元の前に座る。

並子 起立！(立つ)礼。(頭をさげながら)お願いしまーす。着席！  
(座る)ふふ。どうぞ。

二人だけの授業がはじまる。

伊元 両手を、みなさん、前にだしてみてください。

並子、両手をだす。

伊元 そうしたら、その手を結んで、開いてしてみてください。

並子、結んで、開いて……

伊元 今から三億六千万年前、みなさんのその手が、その時つかんでい  
たものは何でしょうか。

………？

伊元 水です。…みなさんのその両手は、その時まだ手ではなく、ヒレ  
でした。私たちは三億六千万年前、水の中を泳ぐ魚でした。すべての  
生き物は、まだ海の中にしかいなかったんです。

並子 わたし……

伊元 はい。

並子 海の中にいたんですか。

伊元 (うなづいて)みんなです。みんな。骨、さわってみてください。

並子 骨？

伊元 骨。

骨らしき箇所をさわってみる。

伊元 その骨の中に、私たちは海の記憶を持っています。カルシウム、  
マグネシウム、リン、それから、あー、硫黄、亜鉛、鉄など。これは、  
海の水に含まれるミネラルです。ですが、まったく同じ成分が、この  
骨の中にあるんです。私たちは、私たちの中に海を持って生きている  
んです。

三億六千万年前、私たちは、四つのヒレを四つの足に進化させ、海  
をこの体のうちに背骨として持ち、水の中から陸へとあがっていきま  
した。今だって人間は、その歴史を体験しながら生まれてくるんです。  
胎児が過ごす、母親の子宮の中は原始の海によく似ています。胎児が  
浮かぶ羊水の成分は、水深二千米ートルを流れる深海水とほぼ同じで、  
宿ったばかりの胎児にはエラのような形が現れます。手足の形は最初、  
魚に似たヒレからはじまり、やがてそのヒレは次第にくびれて、五本  
の指がはっきりと見えてきます。そしていよいよ、私たちは生まれま

す。かつて、三億六千万年前、そうしたように、子宮という海から上陸するんです。初めてこの地上の空気を大きく吸い、そして私たちは産声をあげるんです。その喜びに大きく、大きく泣くんです。

雅彦がいつの間にかいた。

雅彦 やがてその四つのヒレは、四つの足になり、そしてその生き物は、この空をつかもうと、この空をつかみたいと、前足を空へと伸ばした。

並子 あ。

雅彦 地面から離れ、空へと向かった前足はやがて手となり、そしてその生き物はヒトとなった。

並子 今朝方。

雅彦 え？

並子 それはまだ今朝方のこと。今朝方、わたしたちはヒトになった。

(雅彦を見て) あなたも、……わたしも。

雅彦 うん。

伊元 それもぜんぶ、いい思い出です。

その時、そこは思い出になった……

3

誰も、いない。  
音も、聞こえない。

ゆつくりと、雅彦と並子がやってくる。

並子 ほんとに……

雅彦 ん？

並子 ほんとに、誰も、いない……

雅彦 うん……

並子 ほんとに……いたのよね、ここに、ヒトが。だってここは、デパート、だった……

雅彦 うん。

並子 あなたが生まれ、あなたが育った町、にある、たったひとつのデパート、だった……

雅彦 ……

並子 そして、いま、誰も、いない……

雅彦 思い出。思い出。思い出。だけがここにある……

玲子、口ずさみながらやってくる。

玲子はフェンスの向こうの空を見る。

えみ子が声をかける。

雅彦と並子は見ている……

えみ子 飛んでみたら。

玲子 え？

えみ子 飛んでみたら、そこから。

玲子 ……  
えみ子 あ、なんかそんな話あったよね。なんか、あー、……イカロス？  
イカロス？なんか、こう、羽が生えた男の人の。知らない？  
玲子 さあ……  
えみ子 最後はね、なんか、こう、落ちるとよね、地上に。すごいよね  
ー、やっぱり、ニュートン。  
玲子 いや、それニュートン関係ないと思うけど。  
えみ子 だから、飛んでみたら。  
玲子 いや、無理でしょ。  
えみ子 なんて？  
玲子 だって、死ぬから。  
えみ子 そう？  
玲子 いや死ぬでしょ。  
えみ子 そう。残念。でもほんとには飛んでみたいんですよ、もしニュートンがいなかったら。  
玲子 いや、だからニュートン関係ないから。  
えみ子 だからあれよね、ニュートンが生まれる前は、もしかしたら、人間も飛んでたかもしれんよね。  
玲子 おばさん。  
えみ子 おばさん？  
玲子 ニュートンって誰？  
えみ子 あれでしょ、あの、こう、リンゴをこう、頭に掛けて、それで、こう弓矢でバツッって射って、  
玲子 おばさん、それ違うよ。  
えみ子 あのみさ  
玲子 何？  
えみ子 あたしおばさんじゃないから。まだ十九だから。  
玲子 え、ウツソ！  
えみ子 うん、ウソ。  
玲子 はあ？

えみ子 人、飛んでたら面白いね。全然違ったやろね、今と、こう、世界の見え方が。あ、でもこれからそうやって進化するかもね、毎日、みんながこう（羽ばたく）してたら。ほら、やって。  
玲子 は？  
えみ子 進化の第一歩だから。打倒ニュートン・プロジェクト。  
玲子 ……  
えみ子 屋上から飛んでも落ちません。あたしたち。  
玲子 おばさん。  
えみ子 だから——  
玲子 なんてこう、…はぐれるんやろか？  
えみ子 はぐれる？  
玲子 自分が、こう、したかったこととか、いちばん好きだった人とか、なんかそういうのから、なんでこう、はぐれるんやろか？  
えみ子 何、それ？  
玲子 いや……。なんでもない。  
えみ子 道があるって思うからじゃない。  
玲子 え？  
えみ子 この先に道があるって信じるから、はぐれたって思うんじゃないと？  
玲子 え、じゃ、この先に道はないと？  
えみ子 うん。  
玲子 え。  
えみ子 だって道は先にあるもんじゃなくて、後ろにできるもんやろ？  
誰かがそうやって言っちゃったわー。  
玲子 ……  
えみ子 ほら、見てん、空。  
玲子 （空を見る）  
えみ子 道、ないやろ、どこにも。  
玲子 ……  
えみ子 でも、雲はある。雲は、ただ、ある。

玲子 ……

えみ子 「雲はどこにでも似つかはしい姿で現れる」

玲子 何？

えみ子 中村君がね、そうやって言ってた。「雲はどこにでも似つかはしい姿で現れる」って。

玲子 ……

えみ子 ふわっと空に浮かんで、風に吹かれとけばいいんじゃないと、雲みたいに。したらもうどこにもはぐれなくてすむやる。

玲子 「雲はどこにでも似つかはしい姿で現れる」

えみ子 うん。

玲子 ね。

えみ子 ん？

玲子 中村君って誰？

えみ子 さあ、誰やったかな？

玲子 え？

ヒロト (声) 玲子。

えみ子 ほら、風が吹いてきた。じゃあね。

えみ子、去ろうとする。

ヒロトがやってくる。

すれ違う。

ヒロト (玲子に) 誰、あのおばさん？

えみ子 (立ち止まって) おばさん？あたしおばさんじゃないから。まだ十九だから。

ヒロト え、ウツソ！

えみ子 じゃあね。

えみ子、去る。

ヒロト え、ほんとにあの人、十九？

玲子 (小突く)

ヒロト いてっ！何？

玲子 なんでもない。ね、あたしちよつと歌っていい？

ヒロト え？

玲子 そこ(ステージ)で。

ヒロト う、うん。

玲子 聴いてくれる、あたしの歌？

ヒロト おう。もちろん。だってお前、きれいやから。

玲子 (笑って) バカじゃない。

ヒロト よ、待ってましたー(拍手)。ひゅーひゅー。

玲子 うるさい。

ヒロト あ、ごめん。

玲子、歌う。

♪海によく似た あの空に

波によく似た この涙

寄せては返す この思い

流して 流れて

届けましょう

そこには海が できるでしょう

空によく似た 涙の海が

あなたが見上げた その空は

あたしの流した 涙空

ヒロト、沈黙。

玲子 何？拍手は？



ヒロト ……俺でいいと、ほんとに？

玲子 何が？

ヒロト その子の父親。

玲子 ……

ヒロト おなかの子の父親に、俺がなっつていいと？

玲子 ……しようがないがね、だつて。だつてもう…、あの人は帰つて

…

ヒロト ……

玲子 ……あとはもう風に吹かれるしかないもん、あたし。…違う！風に、

吹かれないと、いま。

ヒロト 風？

玲子 あんたよ。

ヒロト え？

玲子 だつて吹いてきたんやもん、風が、急に、ある日突然。だつたら

いまは、もうそれに吹かれるしかないがね。

ヒロト ……

玲子 あたしあんたのこと全然愛してない。いま。ごめん。でもわかんない。明日になつたらわかんない。もしかしたら少し愛してるかもしれない。まだ全然愛してないかもしれない。わかんない。でもきつとあんたはいる。ここにいます。あたしの前にいます。空にぼっかり雲があるみたいに、あたしの前にあんたがいます。あんたが風を吹かす。あたしの雲に。そしたらもうわかんない。明日のあたしがどこにいるかわかんない。あたしあんたのこと全然愛してない。いま。ごめん。でもわかんない。明日になつたらわかんない。

ヒロト ……

玲子 ……どうした？

ヒロト うん…。わかつてはいたけど、そんなにまっすぐ言われると

結構、こう、くるなと思つて…

玲子 ごめん…

ヒロト 明日…。考えればいいね。明日。明日はわからんもん。だか

…考えるのは明日で、今日はいればいい、ここに。玲子のそばに。

玲子 ……うん。

ヒロト 玲子。

玲子 ……

ヒロト なんでもない。名前、呼んでみただけ。玲子。

玲子 え？

ヒロト ふふ。

玲子 気持ち悪ッ！

もんちゃんが背後から声をかけた。

もんちゃん あの

ヒロト うわあー！びっくりしたー！もおー、急に後ろから声かけんで

くれん。心臓が半分くらいに縮んだがよ。

もんちゃん ……

ヒロト ……何？

もんちゃん ……

ヒロト いや、だから、何って？

もんちゃん ……

ヒロト いやいやいや。声かけたやろ、俺に。

もんちゃん ……

ヒロト ……もういいわ。玲子、行こ。

ヒロト、行こうとする。

もんちゃん あの

ヒロト だから！…何？

もんちゃん ……

ヒロト ……ん？（玲子に）もしかして、俺の言葉、わからんのかな？

玲子 さあ……

ヒロト あー、日本語、通じて、マスクか？

もんちゃん ん？

ヒロト うわ、やつぱりそうや。こう見えて日本人じゃないっちゃ、この人。アー、ホエア・アー・ユー・フロム？

もんちゃん (ある方向を指す)

ヒロト あ、あっち？あちは……、どこか？ん？中国？アメリカ？

もんちゃん もり。

ヒロト モリ？モリって国あったか？モリ？モリー？モリー？

もんちゃん ヒロト。

ヒロト 何？…え？

もんちゃん 帰ろ。

ヒロト え？

もんちゃん 帰ろ。

ヒロト ……？？？何？何が起きてる？何が起きてる、今？何が起きてる、今、俺に？

もんちゃん 待ってる。

ヒロト え？

もんちゃん、行こうとする。

玲子 もんちゃん？もんちゃんじゃない？

ヒロト え、誰？もんちゃんって？

玲子 わからん。

ヒロト え？

玲子 ここに、いつもいたと、あたしが高校の時。そう、すずめさんのショーがある時にいっつも。

ヒロト もんちゃん？

玲子 誰がそうやって呼んでたか覚えてないんやけど、でも、もんちゃんって……。 (呼んでみる) もんちゃん。

もんちゃん、ふふと笑っていなくなる。

玲子 あ、ちよつと待って！

もんちゃんを追って、玲子とヒロトも去る。  
すれ違いに伊元と俊彦が入ってくる。

伊元 あ、ヒロト。

俊彦 え？

伊元 ほら、ヒロトよ。おんなじクラスやったやろ。

俊彦 あー。ヒロト。

伊元 そう。

俊彦 何してるんですか、あいつ？

伊元 さあねー。

俊彦 でも、ほんと、変わらないですね。

伊元 ん、ヒロト？

俊彦 いや、先生が。

伊元 いやあ、そうでもないよ。

俊彦 奥さんもお元気ですか？

伊元 ……ああ、うん…

俊彦 もうお幾つになられたんですか？

伊元 ん？ウチの？

俊彦 いや、先生が。

伊元 ああ、うん。…六十二。

俊彦 じゃ、もう…

伊元 うん。定年した、一昨年。

俊彦 ああ、おめでとうございます。ん？「おめでとうございます」、  
っておかしいですか？

伊元 いや…

俊彦 ん？こういう時、何て言うんですかね？「愁傷様でした」？  
伊元 めでたいんじゃないのかな、一応、定年まで勤めあげたつちゆう  
ことやから。

俊彦 ああ、じゃ、やっぱり、おめでとうございます。

伊元 ありがとう。

俊彦 今は何かされてるんですか？

伊元 ……

俊彦 ……

伊元 何をしたらいいのかな？

俊彦 ……

伊元 何かせんと駄目かな？

俊彦 ……

伊元 わからんよね……

俊彦 ……

伊元 翌日にね、退職した日の、だから、あー、四月一日にね、奥さん  
が友達と旅行に行くって言って、それで、それからずっと帰ってこん  
のよね。……どこまで行っちゃよつとかな。南極？アフリカ？パプアニュ  
ーギニア？どこだと思う？

俊彦 ……ハワイ、とか……

伊元 ……

沈黙。

俊彦 あ、そういえば、

伊元 ……

俊彦 ちゃんと名乗ってないけど、僕のこと、誰だか分かります？

伊元 ……。(ニコツと笑う)

俊彦 え？

伊元 冗談って。わかってるよ。今も漫才してると？お兄さんと。

俊彦 いや。

伊元 なんで？

俊彦 ここにいないから。

伊元 誰が？

俊彦 兄さんが。

伊元 どっかよそ？

俊彦 はい。

伊元 仕事ね？

俊彦 はい。

伊元 そっか。もったいないね。

俊彦 そうですか？

伊元 そうよ。ほら、あれ面白かったわー。あの、なんか魔法使う、兄  
弟の話。

俊彦 あ、覚えていらっしやいますか？

伊元 結構、何回か見た覚えが……

俊彦 ま、あんまりネタなかったんで……

伊元 あ、ごめん。

俊彦 いえ。

伊元 でも、また見たいね、あれ。

俊彦 僕もです。

伊元 ふふ。

俊彦 ま、また、いつか……

伊元 そのうちね……

俊彦 はい。

伊元 そんなこともあるやろ……

俊彦 はい。

風が吹く。

雅彦が入っていく。

雅彦 ほら、やるぞ、漫才。  
俊彦 兄さん。  
雅彦 ほら、ステージの方に行つて。  
俊彦 いつ帰つてきたと？  
雅彦 いま。  
俊彦 バス？  
雅彦 うん、バス。いつまで走るんやるな。明日からもうここには降りる人おらんとに、デパート前。  
俊彦 兄さん。  
雅彦 ん？  
俊彦 (並子を指して) その方は？  
雅彦 あ、うん。三橋並子さん。  
並子 こんにちは。  
俊彦 こんにちは。  
雅彦 一緒に、暮らしてる人。向こうで。  
俊彦 ああ。あ、俊彦です。弟です。  
並子 いろいろ聞いてます。一緒に漫才やってたんですよね。  
俊彦 はい。あ、(伊元を紹介して) 高校の時の先生。ここであつたり会つて。  
伊元 あ、あの、トシ君の高校の担任をしてた伊元です。  
雅彦 どうも。  
伊元 何度かここで漫才も見せてもらったことが…、あの、なんかのお祭りの時ですかね…。  
雅彦 お祭りは、あ……、はい…。  
伊元 やつてくださるんですか、漫才？いまから、ここで。  
雅彦 はい。(俊彦に) ほら、行くぞ。  
俊彦 うん。

伊元、拍手。並子も拍手する。  
二人の漫才がはじまる。

雅彦 「どうもー。兄のゼンタです。」  
俊彦 「どうもー。弟のサンペイです。」  
雅彦 「サンペイちゃん。」  
俊彦 「何？」  
雅彦 「僕、今日、学校から魔法を使って帰ってくるぞ。」  
俊彦 「魔法？」  
雅彦 「へん、魔法だぞう。」  
俊彦 「魔法つて何さ。」  
雅彦 「魔法を知らないのかい。童話によくでてくるじゃあないか。魔法つかいつていうのがあるだろう。人間をヒツジにしたり、犬にしたり、それから自分で小鳥になったり、トンボになったりさ。」  
俊彦 「じゃあ、兄さん、トンボになって帰ってくるの？」  
雅彦 「トンボになんか、なるかい。」  
俊彦 「じゃあ、チョウがいいよ。きれいな、きれいなチョウチョウ。」  
雅彦 「だめだ。チョウなんか、きらいだよ。」  
俊彦 「じゃあ、何になるの。」  
雅彦 「そうだなあ。僕、もしかししたら、ツバメになるかもわかんないよ。早いからね。空をひと飛びだ。つうッ。」  
と、雅彦、両手を広げてひとまわり。  
雅彦 「もしかししたら、ハトだ。白ハト。伝書バト。ぱたぱたッ、ぱたぱたッ、飛行機より、早いんだぞ。」  
と、雅彦、両手を広げてひとまわり。  
雅彦 「でも、うちへ入ってくる時は、サンペイちゃんにわかんないよ。うに、門のところから、アリになって入ってくるかもしれないよ。そして、そうっとサンペイちゃんの背中へはい上がって、手の届かない

ところを、ちくつと刺してやるんだ。わあ、おもしろいなあ。」

俊彦 「アリなんか、なんでもないよ。すぐ、服をぬいで、指でひねりつぶしてしまうから。」

雅彦 「だったら、へビになつてくる。サンペイちゃんが庭へ出てくる  
ところへ、入って行って、ガブツと手でも足でも、かみついてしま  
うぞ。そうら、へビだ、へビだあ。」

と、雅彦、へビのようなまねをしながら、去る。

雅彦 「すぐ戻ってきて」 ただいま。」

俊彦 「あれ、兄さん、魔法は？」

雅彦 「あつ、魔法か。今、門まで風になつてふいてきたんだけど、門  
から、もうやめて、入ってきたんだよ。」

俊彦 「うそだ。」

雅彦 「本当は、兄さんは風なんだよ。それが魔法を使って人間になっ  
てんだよ。」

俊彦 「うそだ。兄さんは最初から人間じゃないか。」

雅彦 「うそなもんか。そんなことを言うと、サンペイちゃんだって、  
すぐチョウにしつちまうぞ。」

俊彦 「うん、チョウにしてよ。すぐしてよ。僕、チョウ大好きなんだ。」

雅彦 「だって、チョウになったら、もう人間になれないんだぞ。」

俊彦 「いいよ、空が飛べるからいいよ。」

雅彦 「家になんぞ帰れないぞ。」

俊彦 「いいよ。飛んで帰ってしまうよ。」

雅彦 「帰ったってだめだ。チョウだもの。誰も相手にしてくれやしな  
い。追いだせ、追いだせって、たたきだしてしまふさ。」

俊彦 「いいよ、いいからチョウにしてよ。すぐしてよ。」

雅彦 「よし。じゃあ、今からもうサンペイちゃんは、チョウだ。」

俊彦 「え？兄さん、魔法使ったの？」

雅彦 「そうさあ、大魔法を使ったんだ。」

俊彦 「いつ？」

雅彦 「今さ。」

俊彦 「何もなかったじゃあないの。」

雅彦 「それがしたのさ。サンペイちゃんなんか、わかんないように、  
やつたんだ。だから魔法なんだ。」

俊彦 「ふうん。じゃあ、今、僕、もうチョウなの？」

雅彦 「ああ、チョウだ。」

俊彦 「ほんとに。」

雅彦 「どつからどう見ても、チョウだ。」

俊彦 「飛んでる？」

雅彦 「飛んでる、飛んでる。あんまりひらひらするから、つかまえら  
れないや。」

と、雅彦、ふわふわと動く。

俊彦 「あ、なんだ。」

雅彦 「ん？」

俊彦 「兄さんも一緒にチョウになったんだね。」

雅彦 「え？」

俊彦 「だって兄さん、ヒラヒラしてる。」

雅彦 「ああ、そうさ。兄さんもチョウなんだ。ひーらひーら。」

と、雅彦、さらにヒラヒラとしながら、去る。

俊彦 「(見送って)それから兄さんはもう二度とここには帰ってきま  
せんでした。おしまい。」

雅彦、戻ってきて、

二人 どうもありがとうございました。

(坪田譲治「魔法」より)

拍手。  
途中から、玲子とヒロトも見ていた。

俊彦 あ、ヒロト。  
ヒロト オッス。久しぶり。

突然、どこからか放送が聞こえる。

「災害対策本部からのお知らせです。  
本日災害対策本部は大変重大な決定を行いました。  
た。

このたびの事故が好転の兆しが見えるまで、避難  
できるみなさんは自主的に避難してください。避  
難されないみなさんは、屋内退避を続けてくださ  
い。みなさんお元気で。」

閉店の音楽。

伊元、俊彦、玲子、ヒロトは空を見上げる。

伊元 見上げると、そこにはいつも空があった。

俊彦 わたしがこどもだったとき、ここには広い空があった。

玲子 わたしが十七歳だったとき、ここには青い空があった。

伊元 わたしが恋をしたとき、ここにはすきとおった空があった。

ヒロト わたしがひとりぼっちだったとき、ここには優しい空があった。

俊彦 わたしがおとなになったとき、ここにはやわらかな空があった。

ヒロト わたしが出たとき、ここには高い空があった。

玲子 わたしが母親になったとき、ここには静かな空があった。

伊元 わたしが年老いたとき、ここにはおだやかな空があった。  
俊彦 見上げると、そこにはいつも空があった。  
玲子 きっと、あたしがいなくなったそのずっとあとも。それから、  
あたしが生まれるそのずっと前も。いつもそこに、この空。

もんちゃんがいた……

もんちゃん 帰ろ。もり。帰ろ。

もんちゃんに導かれ、歩きだす四人。

雅彦 (つぶやくように) 待つて……。行かんで……。待つて……。待  
つて……。いなくなったら……。みんながいなくなったら、俺にはも  
う帰ってくる所がないがね。ここが……。ここが……。ここが……。ここが……。  
どっから見ても同じって言うけど……。空はぜんぶつながってるって  
言うけど、でも、ここからしか見えん空があるやろ。そんな空がある  
やろ。ここ……。ここ……。ここ……。ここ……。

けれど、もんちゃんと四人は静かに去っていった  
……

誰も、いない。

音も、聞こえない。

雅彦と並子がいる。

並子 ほんとに……

雅彦 ほん？

並子 ほんとに、誰も、いない……

雅彦 うん……

並子 ほんとに……いたのよね、ここに、ヒトが。だってここは、デパート、だった……

雅彦 うん。

並子 あなたが生まれ、あなたが育った町、にある、たったひとつのデパート、だった……

雅彦 ……

並子 そして、いま、誰も、いない……

雅彦 ……

並子 思い出。あなたの思い出だけがここにある……

雅彦 ひゅー、ひゅー……。ただ、風のように……

並子 ……

風が吹きぬけてゆく……

雅彦 もう行こう。

並子 ……うん。

雅彦 もう、諦めよう。

並子 ……

雅彦 ここにはもう誰も来ない。

並子 ……うん。

けれど雅彦は動かない……

長い沈黙。

並子 ……

ふらっと、えみ子がやってくる

雅彦 え……

えみ子 見上げると、そこにはいつも空があった。

伊元の声がする。  
「もういいかい」

えみ子 まあだだよ。

伊元(声) もういいかい。

えみ子 まあだだよ。

伊元(声) もういいかい。

えみ子 もういいよー。

伊元がやってくる。

伊元 いた。

えみ子 あ。見つけた。

伊元 ……

えみ子 たがいま。

伊元 ……おかえり。

えみ子 ちよつと……

伊元 何？

えみ子 歳とつた……

伊元 とつたよ、そりゃ。

えみ子 ふふふ。…会いたかった？

伊元 ……

えみ子 ふふふ。

伊元 ……

えみ子 ……ね。

伊元 ん？

えみ子 話していい？

伊元 え？

えみ子 いろんなことがあったと。はじめて見たものとか、はじめて行

ったとことか。そんなの、全部、話していい？

伊元 (うなづく)

えみ子 聞く？

伊元 うん。

「先生」と言いながらヒロトと俊彦がやってくる。

伊元 おう、お前ら。

ヒロト 先生、トシ君が俺のこと、三頭身って言う。

俊彦 先生、ヒロトが僕のこと、いがぐり野郎って言う。

ヒロト お前が先に言ったんやろ。

俊彦 お前が先に言ったよ。

伊元 小学生か、お前ら。

玲子もやってくる。

玲子 あんたたち何やちよつと？

ヒロト・俊彦 玲子。

ヒロト (俊彦に) おい、お前が「玲子」って言うな！

俊彦 てへっ。

玲子 ね、すずめさんのショーは？もうすぐはじまるんやろ？

ヒロト え、何言ってると？

玲子 何？

ヒロト だってお前が美空すずめやろ。(俊彦に) ね？

雅彦 え？……あ、うん……

玲子 あ、そうやった、あたし美空すずめやった！あ、みなさん、大変お待たせしました。それでは聴いてください。「素適なランデブー」。

どうぞみなさんも一緒に！

みんな、歌う。

♪私の好きな あの人が

昼の休みに 言いました

いつもの所 いつもの様に

あなたの来るのを 待っている

ランランランラン ランデブー

ランランランラン ランデブー

若い心 弾む今宵 囁くは

アイアイアイアイ アイラブユー

ユーユーユーユー ユーラブミー

若い命 燃やす今宵

ランラン ランデブー

ランラン ランデブー

雅彦 何、これ……？何やつと、これ？

伊元 思い出。

雅彦 え、でもこんな……、こんなこと……

伊元 うん、ほんとはなかったかもしれん。でも思い出やからね。だからなんでもありやとよ。そう思ったらそこに、それはある。ま、そういうことやね。

玲子 さ、雅彦さんも一緒に！

雅彦 え？

ヒロト 二番！

二番、といつても一番と同じ歌詞。

それを歌うみんなと、雅彦。

見ている並子。

不意に

不意に



並子 「そこに、みんな生きている。どこかに、みんな生きている。どこかの、そこに。だからあたしたちも帰ろう、そこに。家に。あたしたちの家に。「おかえりなさい」。そこであたしは言う。あなたに向かつて、毎日。毎日。「おかえりなさい」。そこがあたしたちの家。そこにはたっくさんの人たちが生きている。あなたの思い出の人たちと、あたしの思い出の人たちと。そんなたっくさんの人たちが生きている。あたしたちの思い出の森。そんな家。そんな家に帰ろう。あたしたち、家族になろう。そして、ヒトになろう。」

雅彦 並子……

えみ子 (歌う) ♪空はさー つながっているんだぜ ぜんぶ イエイ イエイ

みな、それぞれに、勝手に、歌う。

「♪空はさー つながっているんだぜ ぜんぶ

イエイイエイ」

雅彦 ふふ。

並子 おかえりなさい。

雅彦 ……、ただいま。

伊元が歌いだし、みんなも歌う。

♪いつのことだか 思いだしてごらん

あんなことこんなこと あったでしょう

うれしかったこと おもしろかったこと

いつになっても わすれない

(「思い出のアルバム」)

俊彦 サンペイちゃん。  
雅彦 ?

俊彦 サンペイちゃん。

雅彦 ……

俊彦 僕、今日、学校から魔法を使って帰ってくるぞ。

雅彦 魔法？

俊彦 そうさ。魔法さ。サンペイちゃんだって、すぐチョウにしつちまうぞ。

雅彦 チョウか……

俊彦 何がいい？トンボ？ツバメ？ハト？あ、へび？

雅彦 へびはちよつとなあ。やっぱり…

俊彦 ん？

雅彦 風がいい。

俊彦 風？

雅彦 うん。

俊彦 いったらっしゃい。

雅彦 うん。…いつてきます。

ヒロト はい、これ。

ヒロト、あの傘を雅彦に渡す。

雅彦 え……

雅彦、傘を広げてみる。

雅彦 ふふ。

雅彦、歩きだす。

並子と一緒に……

見送る人たち。

もんちゃんもやってくる。  
見送って……

もんちゃん ひひひひひ。

そして、空に向かって、手を握ったり離したり…

…

みんなもそうしてみる……

みんな ひひひひひ。

—— おしまい ——